

タイトル：マムルーク文書セミナー

日時：2023年1月28日（土）～1月29日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

文責：荒井 悠太（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 研究員）

同セミナーは、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（以下 AA 研）の外国人共同研究員として来日中のオマル・アリー氏（ソハーグ大学）を講師として開催された。実践的な講義形式を通じて、マムルーク朝時代の各種文書史料を読解する訓練を積み、各々の研究に活用することを企図したセミナーである。国内において文書史料の読解訓練を積む機会は多くなく、今後文書研究を計画している大学院生等にとっては貴重な機会であったと思われる。

マムルーク朝時代の文書は概して筆跡が不明瞭で慣れるまでは判読が難しく、筆者自身が普段使用している写本史料に比べても史料としてのハードルは高く感じられる。とりわけスィヤーク数字と呼ばれる特殊な数字に至っては、初見ではそれが数字であることすら理解困難である。スィヤーク数字にかんする講義にも二時間ほどが割り当てられたが、この間にも参加者の判読力は目に見えて向上したように思われる（筆者は除く）。

講義は以下のようなかたちで進められた。まず初日の午前中にワクフ文書、契約文書等マムルーク朝時代の様々な種類の文書が紹介された。その後は文書の一つ一つを取り上げ、参加者が各自可能な限りの校訂を行った後に、講師を中心にそれを輪読した。手作業と発音を組み合わせたエジプト式の教授法はかなり頭を使うが、少しずつ判読の精度が高まってゆく実感があり、手書き文書を読み解いてゆく醍醐味を感じさせるものであった。

本セミナーの大きな特徴の一つは、講義がすべて通訳なしのアラビア語で行われたことであろう。筆者は曲がりなりにも現地滞在経験を有し、また同セミナーに先立って実施された別のセミナーにも参加するなど、アラビア語の感覚を幾分取り戻した上でセミナーに臨み、大いに有意義な経験になったと感じている一方、難解な手書き文書を判読しながらアラビア語での解説を聞く作業にはやはり重い手応えを感じた。

また同セミナーは、普段交流する機会の少ない遠方の学生と交流する場としても有意義であったと思われる。留学経験をもたない修士課程の参加者にとっては、二日にわたって生のアラビア語を聴き続けること自体が未知の経験であったようであるが、休憩時間や終了後の懇親会では互いの研究について質問をかわす姿もみられた。このような交流は対面形式の大きな利点の一つであり、今後も継続して欲しいところである。

また、講師のオマル氏はエジプトにおける文書研究の現状、後継者不足を強く憂慮しており、日本の研究者との交流に大変積極的に取り組まれていることが印象的であった。長年歴史研究に携わってこられたオマル氏の驚くべき知識と記憶力には大いに学ぶところがあり、本セミナーを契機として、今後も持続的な協力関係を構築してゆければと思う。

最後に、講師のオマル氏ならびに同セミナーをプロデュースして下さった熊倉和歌子氏に厚く御礼を申し上げます。